

ボンデイ社会における女性の死後の移動

高村 美也子

キーワード

死後の所属移動、ボンデイ女性、ボンデイ社会、父系制社会

1. はじめに

本稿では、タンザニア北東部の農耕民ボンデイ社会における女性の死後の移動の意義について考察する。父系制社会であるボンデイの死者の扱いに関する慣習として、その死者の遺体は、父方の祖先が眠る土地に埋葬され、祖先と共に永遠の眠りにつく。たとえ遠方の国内もしくは国外で死亡しても、可能な限り、遺体は祖先が眠る土地まで運ばれる。ただし、男性が実家から離れた場所に家を建て農地を拓き、その所有地の一部を墓地として設定した場合、その場所がその男性の子孫にとって、祖先の土地として機能していく。

一方、婚姻のために外で過ごしていた娘が死亡した場合、婚出先の土地に埋葬されるのではなく、遺体は生物学上の父の元に戻り、父方の祖先が眠る土地に埋葬される。ボンデイ社会には、娘を婚姻期間のみ婚出先に与えるが、死後は娘を実父の元に「返してもらう」、または、死後は実父のもとに「帰る」という慣習がある。性別は関係なく、既婚か未婚の別に関わらず、子どもは死後に実父の元に移動することで、ボンデイの人々の一生が完結していると言えるだろう。

本稿はこの事象を「死後の移動」として捉え、ボンデイの家族観、女性の一生とは何を指すのかを問うていくものである。

2. 調査地概要

ボンデイ族の主な居住地は、東アフリカ・タンザニア連合共和国、タンガ州ムヘザ県である。タンガ州の特徴は、インド洋に面することから、2000年前ほどから交易をおこなっていたアラブ・ペルシアの商人たちが滞在したことで、在来文化とアラブ・ペルシアの文化が融合した結果としてのスワヒリ文化が発達している点である。そのため、イスラーム文化が定着している。このように地元住民は外来文化を受け入れてきており、生業もアラブ・ペルシア人たちがもたらしたものを継承している。

主な生業は農業である。自家消費作物はトウモロコシとキャッサバ、換金作物はココヤシとオレンジである。ココヤシはアラブ・ペルシア人たちがプランテーション開拓によってもたらされ、その後地元住民が自宅農地に導入した外来農作物であり、オレンジも10年ほど前から換金作物として主流になりつつある外来農作物である。ココヤシ栽培はタンザニ

ア国内全域に出荷されるほか、オレンジは隣国のケニアからも買い手がおり、ともに人気で経済的に高い価値を持つ農作物である。

ボンデイ族の人口は 80,000 (1987 年) といわれているが、タンザニア連合共和国初代大統領ニエレレ (任期 1962-1985 年) が社会主義政策をかかげ、120 以上の民族で構成されているタンザニアを民族で区別しない制度を採用した結果、現在は各民族の人数の人口を把握することは困難になっている。ボンデイの宗教は、祖霊信仰が中心である土着宗教が基盤となり、その上に外来宗教であるイスラームとキリスト教が存在している。伝統的な土着信仰は衰退しつつあるが、人々は、イスラームもしくはキリスト教のどちらかに属しつつ、土着宗教の信仰を残している。キリスト教が到来する前は、イスラームが主流であったが、キリスト教が到来すると、多くの人々が改宗し、現在では、イスラームが約 50%、キリスト教が約 50%である。

言語は、民族語であるボンデイ語と国語兼公用語であるスワヒリ語が使用されている。ただし、近年ではスワヒリ語の普及により、ボンデイ語の使用が減少し、50 代以下では、ほぼボンデイ語は使用されていない。現在のところ、儀礼の唄や用語においてはボンデイ語の使用が認められるが、今後はスワヒリ語に変化していく可能性がある。そのため、ボンデイ語で継承されてきた伝統は、衰退していく可能性を秘めている。

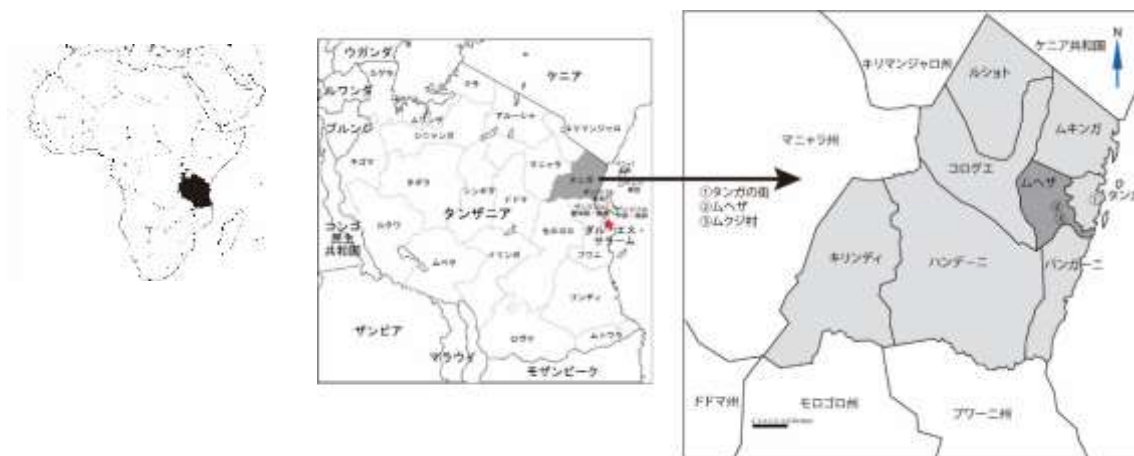


図1 ボンデイ族が主に居住する地域

3. 論点の枠組み

本論文では、農耕社会における①父系血縁集団と、②女性の一生に着目することで、ボンデイ社会の死について議論を試みる。

まず、アフリカの農耕社会の父系血縁集団に関しては、米山 (1990) が農耕民社会の共通点の一つとして、父系血縁集団を持つことを指摘している。例えば、ウガンダのアンバ社会では、子どもは生物学的な意味の父親に所属している (エドワード 1968)。このように、多くの研究では父系社会における子の所属は論じられるが、一生を通して見た場合に子、特に娘がどこに所属するのかはうまくとらえられていない傾向にある。婚姻の交換制度に関し

では、レヴィ=ストロース（2000）は婚姻制度を、集団間における女性の交換とみなしている。しかし、それは主に生きた女性に関わるもので、女性の「死後の移動」は注目されにくい。

本稿では、ボンデイ女性の死後の移動に着目し、死後の移動で人生が完結するボンデイ女性の人生の構造を示す。

4. 葬送儀礼

4-1. 死亡から葬儀まで

ここでは、ボンデイの人が死亡してから葬儀が終了するまでの一連の流れをまとめておく。父系制のボンデイ近隣の農耕社会では、男性は父方の土地もしくは所有地に埋葬され、女性は婚出先である夫側の土地に埋葬される。ボンデイ女性が異部族と結婚して死亡した場合、婚出先である夫の父方の土地に埋葬される。しかし、ボンデイ同士の結婚の場合、基本的に子どもたちは死亡すると父の元に戻るものとされるのが特徴である。以下では、キリスト教式の手順を例にしながら、ボンデイが死亡した後の流れを紹介する。

死亡から葬儀までの手順

死去から埋葬前まで

- ①死亡後、病院で遺体の処理が行われる。
- ②実家では、残された家族を弔うため、近所の人々が弔問する。
- ③親族は、死亡の実家に集まり、葬儀が終わるまで滞在する。集まった親族は、宿に泊まることはなく、実家の空いている部屋で莫蔭を敷いて雑魚寝するか、外に莫蔭を敷いて雑魚寝する。

埋葬当日

- ④集まった村の女性と親族の女性は弔問客のための、朝食と昼食作りを行う。
- ⑤集まった村の男性たちと親族の男性は、遺体を埋葬する穴を掘る。
- ⑥棺桶に入った遺体が実家に到着。
- ⑦集まった弔問客と親族が最後の別れをする。
- ⑧男性たちが棺桶を教会に運び、牧師による故人への祈りを施す。
- ⑨男性たちが棺桶を担ぎ、埋葬地まで運ぶ。
- ⑩牧師が祈りをささげる。
- ⑪男性たちが穴に入り、棺桶を穴の中に丁寧に置く。
- ⑫葬儀に参加した男性たちが、棺桶に土をかぶせていく。
- ⑬全員で花やろうそくを墓の上に置き、牧師が最後に祈祷を行い終了する。

埋葬後の霊の状態と遺族

- ⑭喪に服している家族は、7日間外出しない。喪の期間は40日間から1年間となる。喪に服している間、女性は髪を伸ばさず、地味な服装をする。
- ⑮ロバイーニ（*arobaini* 40日）という追悼の儀式を行う。

ボンデイの慣習的行事。魂は山羊に乗って天の神様のところへ上がり、空中（ペポーニ *peponi*）に漂っている状態ではなくなる。

－慣習行事内容－

- a. （死去した方が親の場合）新たな親代わりが与えられる。死者が実母ならば、残された家族に「第2の母」が与えられる。実父ならば、「第2の父」が与えられる。親族の中から、残された家族の相談役になる人物が選ばれる。
- b. 遺留品の分配。死去した人の遺留品を家族で分配して相続する。

⑩回忌（クンプクンプ *kumbukumbu*）

死者が寂しがらないよう親族が集まり、追悼式を行う。

以上がボンデイの葬儀にまつわる行事である。こうしてみると、キリスト教、ボンデイの慣習が混在していることが分かる。たとえキリスト教が人々の信仰を網羅していても、その根底にはボンデイの慣習が基盤と存在していると言えるだろう。

5. ボンデイの家系図から見る埋葬場所

ボンデイ社会において、女性の埋葬地がいかにかに決まるかは、先述した通りである。しかし、それらは基本の形であり、実際にはさまざまな要素によって埋葬地の選択には幅がある。以下では、2家族の事例を通して、ボンデイ女性の実際の埋葬場所がどのような仕組みで決まるのかをみていく。

2家族はともにキリスト教信者であることから、法的には一夫一妻の形式をとっている¹。またどちらも、婚外子や未婚の母がいることから、娘と娘の子どもが実家で過ごすなど、複雑な家庭関係があらわれる特徴がある。

以下の事例で取り上げるのは、MZ村に居住するS家と、M村に居住するCh家である。両家とも、ボンデイで構成される家族である。ボンデイ社会では、嫁に行った女性が死去した場合、葬儀費用は基本的に実家の家族が負担するが、婚出先の家族と葬儀に参加した人々も支援する。

5-1. S家の家族の土地と埋葬地の関係

S家の既被埋葬者・未被埋葬者の埋葬地の選択の現状を示したものが、**図2**である。**図2**では、家系図に従い、S家の土地に埋葬される人と埋葬されない人を示した。慣習に従ってS家の土地に埋葬されたもしくは埋葬される予定の人を黒、慣習に従ってS家の土地に埋葬されなかったもしくは埋葬されない人を白、慣習に従わず、S家の土地に埋葬された人をグレーで示した。当家系図には、S家が所在する村に居住し、土地の所有者であるP.S氏にとってより身近な子孫のみを抜粋した。

¹ ムスリムの場合は、一夫多妻が認められる。

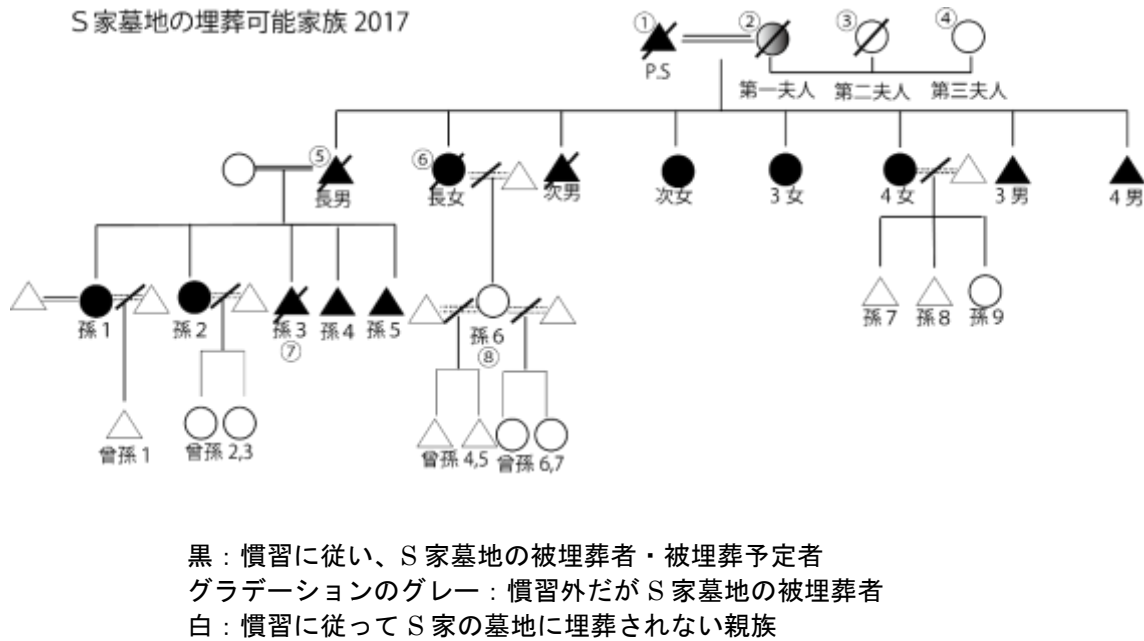


図2 S家の埋葬地

土地の所有者 P.S 氏

家主 P.S 氏 (2012 年没享年 97 歳) が育った実家は、現所有地よりも森の中にあり、祖先は半農半猟を行い、生計を立てていた。P.S 氏は、沿岸部に近いタンガ州で仕事を得て、70 年ほど前 (現在 2019 年)、農村の一角に、細く長い木の枝の柱と赤土の土壁とココヤシの葉の屋根でできた家を見て、家庭を築き、農地を拓き、埋葬地も設置した。よって、この土地は P.S 氏から始まり、子どもたちや孫たちなどの直系子孫が埋葬されていく場所となった。

3 人の妻たち

ボンデイの P.S 氏家族の家系図から、女性の埋葬状況を見てみる。97 年間生きた P.S 氏は、これまで 3 度結婚をした。一度目の結婚は 30 年間ほど続き、第一夫人①の死去により、第一夫人との婚姻生活は終了した。第一夫人との間には 8 人の子どもが存在する。その子供には、それぞれ 3 人ほどの子どもたち (孫) が存在する。またその孫にもそれぞれ 3 人ほどの子ども (ひ孫) が存在する。よって、P.S 氏と第一夫人から始まる家族の人数は、現在、100 人以上となった。第一夫人が死去する際、本人の希望で、第一夫人の実家に埋葬されるのではなく、夫 P.S 氏の土地に埋葬されることとなった。

第二夫人②と第三夫人③には P.S 氏との間に子どもはいない。第二夫人との婚姻生活は 10 年ほどであり、第二夫人との婚姻生活は、第二夫人の死去により終了した。第二夫人の遺体は、第二夫人の実家の元に運ばれ、実父が眠る土地に埋葬された。

第三夫人③は、K 村に居住している母方の祖先が眠る土地に埋葬してほしい、という希望を持っている。慣習的には、実父の土地である L 村で埋葬される。前夫の死去により寡婦となり、その後 P.S 氏と結婚をした。第三夫人には前夫との間に 4 人の子どもをもうけてい

る。そして、P.S 氏の死去により、第三夫人は再び寡婦となった。現在 (2018 年) 第三夫人の実母が実母の父方の実家である K 村に住んでおり、第三夫人は、その実母の介護をするため K 村に長年居住している。母方親族との交流が深くなり、自分の存在を認知している親族が K 村に多いことから、実母の祖先の土地で埋葬されることを希望している。ただし、彼女の同じ父をもつ兄弟姉妹はすべて他界しており、父方の土地に埋葬されている。一方、P.S の土地への埋葬に関しては、一切考えていない。その理由としては、「P.S の親族が、自分が埋葬されているお墓を訪ねてきてくれても、父親の嫁だからということで訪ねるだけで、自分に愛情をもって来てくれるのではなく、仕方なく来るだけだ。」とのことである。

第三夫人が P.S 氏と結婚したときは、P.S 氏が 70 代半ば、第三夫人が 50 代であった。ボンデイ社会では、婚姻関係があることで社会的に尊重される立場となる。そのため、たとえ高齢になっても結婚を推奨する人々が多い。この結婚生活は P.S 氏が 2012 年に死去したことにより終了した。高齢結婚であったが、P.S 氏と第三夫人との間の結婚生活は 20 年近くあり、2019 年現在でも第三夫人は法的には P.S 氏の妻となっている。しかし、P.S 氏と第三夫人の間には子どもがいないこともあり、たとえ婚姻関係が継続していても、P.S 氏家族の中には第三夫人の居場所がないようである。また、約 30 歳の年齢差があるため、P.S 氏の子どもたち、もしくは子どもたちの嫁たちと第三夫人は同世代であり、そこに違和感があるようだ。第三夫人は現在 60 代で健在だが、自分が死去した場合、埋葬地には自分の母と母の兄弟姉妹が眠る母方の祖先の土地に埋葬されることを望んでいる。その理由は、最後まで世話をした母とその親族の子孫ならば、自分が眠る墓にも愛情をもって訪ねてくれることを確信しているからであった。

子ども世代

P.S 氏の子どもは、4 男 4 女の合計 8 人である。その内、長男、次男、長女の 3 名は、P.S 氏が死去する前に病気で他界した。彼ら全員、父である P.S 氏の土地に埋葬されている。P.S 氏の子どもたちのうち、現在 (2018 年) は、次女、三女、四女、三男、四男が健在であり、娘たちは皆、婚姻のため地方で暮らしている。四女はヨーロッパ留学を経て公務員となり、その結果経済的に恵まれ、P.S 氏を常に支援していた。現在でも、兄弟姉妹を支援している。その支援があり、P.S 家の墓石は最新の立派なタイル張りのキリスト教式の墓への建て替えが進められている。

この中で注目したいのは、長男⑤と長女⑥である。長男⑤は、病気により 60 代で他界し、P.S 氏の所有地に埋葬された。長男⑤には本妻と外婚妻がいる。本妻との間には 5 人の子どもがいる。婚外妻との間には 1 人の子どもがいる。長男⑤は本妻と本妻との子どもとは暮らしを共にしていたが、婚外妻とその子どもとは同居していない。それでも婚外妻と婚外子は、長男⑤の葬儀に参加していた。さらに、婚外子の所属は父である長男⑤であることもあり、家族一員として葬儀の手伝いを行っていた。

長女⑥も病気により 60 代で他界した。長女は未婚の母で、子どもたちを実家である MZ 村で育てた。長女は生涯、MZ 村で生活をしてきたため、病床に臥した際も、MZ 村で療養を受けることができた。死去した際には、遺体は父 P.S 氏の所有地に埋葬された。

孫世代

孫の世代となると、P.S氏が居住するMZ村で暮らす人は少なく、ほとんどがタンザニアの大都市であるダル・エス・サラームに住んでいる。幼少期はMZ村で暮らす、高校を卒業すると、仕事を求めて都市に出ていくか、高等教育を求めて都市に出て、生活の基盤をつくっている。そして、都市で結婚し、そのまま都市で生計を立てている。しかし、父がP.S氏の直系の孫の場合、行事があるごとにMZ村に帰省し、MZ村に居住する家族・親族との交流を深めている。

孫の世代では、長男⑥の息子⑦が36歳の若さで病気により他界した。病気の際の入院先は都市であるダル・エス・サラーム市で、MZ村から約300km離れた場所であったが、死去した際には、遺体を車で運び、祖父であるP.S氏の土地に埋葬された。長男の息子は、都市に居住し、妻子がいた。子どもは幼いため母親によって養育されているが、学費は父方の兄弟姉妹が負担し、将来的には、子どもは父方家族が引き取ることになっている。

長女の娘⑧は、シングルマザーの母の元で養育され、MZ村で暮らしている。未婚の母に育てられたためMZ村に居住しているが、実父はL村出身の人物である。そのため、いくら母に育てられながらMZ村で長年生活をしていても、死去した場合、L村で埋葬される予定となっている。⑧本人も未婚の母で、息子2人と娘2人を1人で育てている。息子たちの父親と娘たちの父親は異なるが、どちらも婚姻関係を結ばなかった。

ひ孫の世代

未婚の母である長男⑤の孫娘たちの子どもたちは、祖母（長男⑤の嫁）がMZ村で養育し、孫娘たちは都市で働き、村にお金の仕送りをしていた。村に暮らすひ孫たちは、日常的には親からの愛情を与えられることなく養育されている。多くのひ孫は今では20歳前後と成長し、都市に移動して大学へ進学、もしくは働いている。

⑧の息子たちと娘たちは、大学まで進み、立派に成長している。すると、数年前から息子たちの実父が近づきだし、「我が子たち」として受け入れの準備を始めた。したがって、息子たちが死去した場合、父方の土地に埋葬されることになると考えられる。父が異なる娘たちには、まだ実父は娘たちの引き取りを申し出ていないようだ。

続柄	享年	民族	死因	現/ 生前の居住地	埋葬地/埋葬予定地	村名
①家主 P.S	92	ボンデイ	老衰	MZ村	所有地	MZ村
②第一夫人	60代	ボンデイ	病気	MZ村	夫 P.S の土地(許可)	MZ村
③第二夫人	不明	ボンデイ	病気	MZ村	父方の土地	不明
④第三夫人(68)		ボンデイ		K村	母方の土地(希望)	K村
⑤長男	60代	ボンデイ	病気	MZ村	父 P.S の土地	MZ村
⑥長女	60代	ボンデイ	病気	MZ村	父 P.S の土地	MZ村
⑦孫(長男の息子)	36	ボンデイ	病気	都市 DMS	父方祖父 P.S の土地	MZ村
⑧孫(長女の娘)(50)		ボンデイ		MZ村	父方の土地(予定)	L村

表1 S家の埋葬地

5-2. Ch氏家の家族の土地と埋葬地の関係

家系図の中でも、特に特徴的な事例を示しているのが⑨～⑭である。その特徴は下記のと

G.Ch 氏の妻

妻（80歳くらい）は、10代で G.Ch 氏と結婚し、現在婚姻生活は約 60 年間経ち、6 人の子どもに恵まれている。自分の死後は、G.Ch 氏の祖先の土地で埋葬されることは希望しておらず、自分の父方の祖先が眠る墓地で埋葬されることを希望している。その理由に関しては、「ボンデイの慣習に従わなければならないし、そういうものだろう。」と語っていた。他方、夫 G.Ch 氏の祖先の土地で埋葬されたいという考えはない。

子どもたち

長男は、疾病により 30 代で妻と共に他界した。長男は、Ch 氏族の土地に埋葬されている。一方、長男の妻は彼女の実家で埋葬された。残された子ども供たち 4 人（孫世代）は、父方の所属であることもあり、Ch 家の親族の間で養育されてきた。

次男（60）⑩は、就労中は M 村から離れたタンガ市で暮らしていた。生まれも育ちもムクジ村で、家も父 G.Ch の自宅前に建てている。6 人の子どもに恵まれている。定年退職後は、M 村に戻り、妻と共に以前建てた自宅で暮らしている。次男の妻（50 代）⑪は、結婚して 40 年は経っているが、死後はムクジ村から 2km 程離れた実家で埋葬される予定である。しかし、本人の意見としては、埋葬場所は実家の土地でも可能であるし、夫の父方の土地でも可能であると語っている。ただし、実家との協議によっても語っていた。婚姻後、実家との距離が近いこともあり、頻繁に両親、兄弟姉妹の元を訪れている。実家との関係性を大切にしているといえる。次男⑩には、婚姻外の妻と外婚子 2 人がいる。婚姻外の妻が死亡した後は、外婚子 2 人を引き取り、養育してきた。

三男は 2 人の子どもに恵まれ、兄の⑩と同様、父である G.Ch 氏のそばに家建て、妻と共に M 村で暮らしている。仕事は居住地の近郊の街であり、自宅から通勤している。仕事は中学校に努めているが、副業では、半農半畜産を行っている。M 村に居住していることもあり、常に父である G.Ch 氏の世話をしている。

長女はムスリム男性と結婚し、ムスリムに改宗した。居住地は、M 村から 30km キロほど離れた場所である。父方の行事が開催される度に M 村を訪れている。婚姻により M 村から出て行ったが、実家との関係性を保つ理由もあるのか、密に実家と連絡を取り合っている。ただし、夫、子どもたちはほとんど M 村を訪ねてこない。

孫世代

6 人の子どもたちがそれぞれ 2 人以上子どもに恵まれており、孫世代は 20 人以上に達している。その孫たちも子どもを出産しているため、ひ孫世代も徐々に増えている。

次男の娘 J.C⑬は、36 歳で病死した。父方の祖先の土地である M 村に埋葬されている。未婚の母で 1 人の娘がいる。娘の父は近所の人間であるが、⑬と婚姻関係を結ぶことはなかった。親である⑩と⑪は娘⑬が子どもの父親と結婚することを願ったが、それは叶わなかった。よって、⑬は生涯、所属の移動がないまま、生涯を閉じている。

次男⑩の息子 4 名は、1 人を除いて子どもに恵まれている。しかし、3 人とも子どもの母親と婚姻関係を結んでいない。⑩の長男は 3 人の女性の中にそれぞれ子どもをもうけており、3 人目の女性とは夫婦として家庭を築いている。2 人の子どもに関しては、1 人の子ど

もは子どもの母親の実家の祖母が養育し、2人目は長男の母⑫が養育している。本来なら子どもの母親が子どもを養育するが、母親に養育能力がなかったためである。⑪には、婚外子の男子が2人いる。彼らの母親が若くして他界したため、⑫が母となり育ててきた。婚外子の2人は、父の元、父の暮らしを助けながら、これまで培うことのなかった親子関係を形成しようとしている。彼らは、将来、Ch家の祖先の土地に埋葬されることになる。

ひ孫

ひ孫⑭は17歳で病死し、Ch家の墓地に埋葬された。生前、母⑬が未婚の状態で⑭を養育していた。⑭は父の苗字を使用し、父方の家族の所属であることが明らかであるにも拘らず、近所に居住していても父は⑭の養育を一切行わなかった。そのため、母⑬の親たち⑪⑫は⑭を実父に戻すことに抵抗を感じ、協議の末、母方であるCh家が遺体を引き取った。彼女の身体は実母である⑬の向かい側が選ばれ、永遠に離れることのない場所に埋葬された。

系図外の事例

G.Ch氏の甥の妻⑮

62歳で病死した。約40年の婚姻生活を送ったことになる。M村から2kmほど離れたE村の父方の実家の墓地に埋葬された。地方都市で夫と共に暮らしていたが、都市の共同墓地への埋葬は選ばれず、彼女の父方の墓地まで遺体は運ばれ、埋葬された。

次男⑪の義母⑯ (妻⑫の母)

妻⑫の母は90歳くらいで老衰により死去した。彼女の出身地は居住地より10km以上離れている村である。5人の子どもを育て上げ、老後は次男家族と居住していた。夫との婚姻関係は、70年間ほどになるであろう。しかし、彼女は夫の父方の墓地での埋葬を希望することはなかった。また、慣習に従わず、父方の土地に帰るのではなく、アングリカン教会の共同墓地への埋葬を希望した。そして、彼女の遺体は教会の共同墓地に埋葬された。父方の墓地に埋葬しなかった理由としては、距離が離れているということと、彼女が実家を離れてから70年の年月が経ち、自分を認知している家族が少数であるということであった。

続柄	享年	所属集団	死因	現/生前の居住地	埋葬地・埋葬予定地	村名
⑨家主 G.Ch(86)		ボンデイ		M村	父方祖先の土地	M村
⑩妻(70代)		ボンデイ		M村	父方祖先の土地	R村
⑪次男(60)		ボンデイ		タンガ市	父方祖先の土地	M村
⑫次男の妻(50代)		ボンデイ		タンガ市	父方祖先の土地	Kw村
⑬次男の娘 J.C	35	ボンデイ	病気	T市	父方祖先の土地	M村
⑭次男の孫 A. (J.Cの娘)	17	ボンデイ	病気	T市	母方祖先の土地	M村
⑮G.Chの甥の妻	62	ボンデイ	病気	T市	父方祖先の土地	E村
⑯⑪の義理の母	90代	ボンデイ	老衰	不明	アングリカン教会 共同墓地	M村

表2 Ch家の埋葬地(タンガ州(M)村)

6. 事例のまとめ

2つの家族の事例をまとめると、法的な婚姻関係を結ぶ関係性はさほど多くなく、母親が1人で子どもを育てる場合が多くみられることがわかる。「婚姻」という制度よりも、子孫を繁栄させることに重点がおかれていると考えられる。

この2つの家族の埋葬地選択の事例には、大別してボンデイの慣習内と慣習外に分けることができる。2家族の事例から、死後の移動における特徴を論じる。

慣習内

女性の場合、慣習外の方法で埋葬された妻は3人、10代の娘が1人いるが、この4人以上は、生前の暮らしの状態がどのような状態でも、父方の土地に埋葬されていた。

男性の場合、P.S氏のように新たに土地を所有し家を建てた人以外、全員が実父の父方の土地に埋葬されていた。

たとえ未婚の母に母の実家で育てられ、実父との交流が深くなくても、最終的には子どもたちは実父の父方の土地に埋葬されていた。これらの事象から、ほとんどのボンデイの子孫は、ボンデイの慣習に従って、父方の土地に埋葬されていることが明らかになった。

これらの事象に関する背景として、実家の父方の土地に埋葬されることを必然と考えているが、それは伝統的に実施されているという理由が一つと、妻たちは夫側の祖先との血縁関係はないため、夫の親族が墓地を訪れても義務で自分のお墓に挨拶するだけで愛情がないということが二つ目の理由であった。

慣習外

S家において慣習外方法で埋葬された、もしくは埋葬される予定の女性は、2人いた。1人目は、P.S氏の1人目の妻である。彼女は生前、実子たちと共にいることを望み、協議した結果、承諾されたことから夫の土地に埋葬されることができた。2人目は、P.S氏の土地に埋葬されることがないのは、慣習内であるが、実家の父方の土地に埋葬されることを望まず、母方の土地に埋葬されることを望んでいる3番目の妻であった。実母の介護を行うため、母の居住地に長年共に住んでいたことが一つの理由であった。この2人は、血族よりも、愛情・愛着を重視したうえで、埋葬地を自ら選んだといえる。

Ch家においては、17歳で病死したひ孫と、長男の義母の2人の女性が慣習外の方法で埋葬されていた。未婚の母に育てられたひ孫の場合、通常は実父の父方の土地に埋葬されるが、実父は養育を怠っていた事実があったために、彼女の母方の親族が遺体を実父に渡すことを拒否したことが理由であった。2人目の長男の義母の場合は、夫の父方の土地で埋葬されなかった実態は、慣習内であるが、実家が遠くまた親族とも疎遠になってしまったために、信仰してきたキリスト教の共同墓地に埋葬された事例であった。共同墓地の選択は、生前彼女自身が選んだものであった。

これらの事象から分析すると、慣習は義務ではないことがいえる。もちろん血族への愛着はあるが、家族の状況で選択範囲を広げることが可能であることがわかる。

7. 考察

父系制であるボンデイ農耕社会では、死後、実父の元に搬送され、父の祖先が眠る土地に埋葬される実態が、慣習的に継続していることが明らかになった。未婚の母によって母方の土地で養育された子どもの場合でも、また婚姻により長年実家を離れて暮らしてきた娘も、遺体は実家の父方の土地に戻る。筆者は、息子および未婚の娘が父方の土地に埋葬される事象を「死後の移動」、そして婚出した娘が実父の土地で埋葬される事象を「死後の所属移動」と呼びたいと思う。よって、ボンデイ女性の立場を生涯にわたって見通してみると、誕生(実父の父方の所属)→婚姻(夫方の父方の所属)→死去(実父の父方の所属)と、2回の所属移動があることがわかる。

なぜこの死後の移動が重要なのか、その意義を考えてみたい。ボンデイの埋葬地に関する事象を嫁の意見から考えてみると、次のようになるだろう。嫁に行った女性の死後の所属に関しては、夫、義父義母、夫の兄弟姉妹と共に長年暮らしても、血縁関係がないために、永遠に「よそ者」であるという考えが存在するのではないだろうか。血縁関係を重んじるボンデイの人々にとっては、血縁関係のない夫と夫の親族がたとえ嫁として受け入れてくれていても、そこには満たされない感情があるように思う。そのために、死後は再度「娘」となって実父のもとに戻るものがボンデイの女性にとって幸せであると考えられているといえそう。他方、「娘」「子ども」「子孫」の幸せを考え、それ故、父方の祖先の土地に埋葬される慣習は義務ではなく、夫の土地で埋葬される、母方の土地で埋葬される、教会の共同墓地で埋葬される選択も残していると考えられることもできる。

ただし、周囲に居住する他部族は、婚出先で娘は埋葬されるのが常である。たとえば、ボンデイと同系統の言語を話し、近隣に居住するサンバーは、ボンデイはもともとと同じ祖先を持っていると言われており、ボンデイと同じように父系制社会であるが、娘が嫁に行き、そこで死去した場合、夫の祖先が眠る土地で埋葬される。埋葬の差異がどのような背景で異なっているのか、今後改めて考えてみたいと思う。

参考文献

エドワード, H・ウィンター

1968 『“月の山”の彼方 アフリカー夫多妻の記録』、米山俊直訳、宮川書房。

クロード・レヴィ=ストロース

2000 『親族の基本構造』、福井和美訳、青弓社。

坂本 邦彦

2001 『東アフリカ農耕民社会の研究——社会人類学からのアプローチ』、慶應義塾大学出版会。

米山 俊直

1990 『アフリカ農耕民の世界観』、弘文堂。

Anna F. Steyn and Colin M. Rip

1968 “The Changing Urban Bantu Family,” *Journal of Marriage and Family* 30(3): 499-517.

Godfrey Dale

1896 “An Account of the Principal Customs and Habits of the Natives Inhabiting the Bondei Country, Compiled Mainly for the Use of Missionaries in the Country,” *The Journal of the Anthropological Institute of Great Britain and Ireland* (25): 181-239.

Keywords

Shifting belonging family after the death, Bondei women, Bondei society, patrilineal society